



豊穰の月

三浦礼未

豊穰の月

1

熟れた思いを

はらみかけた

十三夜の月

透明な夜

露の降りた稲わら

寝そべる女

闇のむこう

かがいのざわめき

嬌声

半裸の巫女が

踊り狂う足音

飛び散る汗

うちふるう榊の枝に

追われるものは何か

黄金色の大地

冬枯れへむかうまえ

女のなかでひととき

まつりがはじまる

2

夏日

青い衣をぬぎすて

身をひたす

白いせせらぎ

おおいかぶさる森

木々のにおい

山が息をころした

ふいに抱きすくめられ

水にたおれふす

女の髪が

水草とたわむれ

ゆれまどう

そして

男の肩ごしに見あげた

ぎらつく空の蒼

ひっそり夢をつむいだ真昼

女は耳もとで

車のまわる音を聞いた

3

胎内に巡る

見えない糸車

凝結した時

女はぞくりと肩をふるわす

男と女

生命のほむら

交合

神の祝福

あるいは呪縛

嫌悪と陶醉

相反する感情

豊穡の季節

女の心に見え隠れする

したたかな傷口から

二重写しの月が

おびえた子供の瞳のように

とおい光景を

みつめている

大和路にて

晩秋の日ざしにきらめく

なだらかな山の斜面に

柿と蜜柑がたわわに実る

そのふもとまでせまる稲の波

大和は黄金色だった

もりあがる箸墓のむこうに

神奈備の三輪山の姿

言い伝えに

三輪の神は箸墓に眠る

姫君を愛したという

ひとと神が近しかった昔

素朴な世界に

民のまつりがあった

トラクターの音

機械化された稲刈りの風景

髪をなびかせていく

自転車の女学生たち

まぎれもない現代

それでもここの空気は

なつかしい

神々とひとの

自然と人間との

温かな交流の残り香

箸墓の前にたたずむ

私の奥底で

古代の風がざわめいた

冬の山

じゃぐりんど

じゃぐりんど

冬の山が晴れあがる

だれもない

雪山に

地球のまわる

音がする

華月宮

十六夜の月

すらり白い

少女の裸身

においたつ

晩春の草いきれ

こうこうとゆらめく

夜でない夜

露のおりた

草原の彼方から

かげろうのような

白馬がかけてくる

淡い季節のうつろい

けだるく過ぎ去っていく

まどろみの時

あの白馬はどこへいったのか

かすかに残る胸のうずきは

やがてくるはずの

目覚めへの予感

髪にからみつく

しろつめくさを

かるくかんで

少女はふと

ふくみわらいをした

広がっていく

みどりは苦く

ふくらみかけた胸には

まだ永い夢のつづきが

よこたわっている

あかつき

ゆったりとほころぶ

赤い花

うずもれていく月

庚申塔

初夏というのに

風が冷たい

薄曇りの一日

影が沈む

ひっそりとした森

たちならぶ

苔むした石碑

「庚申様の日には

虫が天にいて

人の一年の報告を

するんだよ」

連綿と続く

いとなみ

自然と人間

怖れとあこがれ

いのりと祭

毎日がよくあれと

生きていく

暗い森には

石碑が静かに

ねむっている

山がある

五月の終わり

湖をはさみ

男体山とむかいあう

ふもとの町は

萌えあがる緑にぬりつぶされ

圧倒的な重量の

山だけが

せまる

真上に輝く青空と

足下に続く山のむこう

惑星から

宇宙の底へ

山は大地と宇宙の

はざまにあった

こうして人は

山に神をみたのだと

すきまからのぞきみた

ちっぽけな生命体は

かんがえる

夜の森

うっそりした宵闇の森

ぼんやり照らしだされた

薄赤い木立の光景

にぶい時間が流れ

とけていく自我

春の森には狂気が潜み

静かに広がる次元の傷口が

冷たく甘いしたたりをこぼす

深く沈んだいらだち

こころのなかに

しだいに形作られるもの

ひっそり息をつむいでいた

森がめざめる

I

深い緑のとばり

落ちる木漏れ日

せみしぐれ

草むらにひそむ女

時がくだけで訪れた

生き物としてのいのち

虚ろな影として

独りありつづけた過去

解放を望まなかったといえようそになる

それなのに胸苦しい

濃密なくさいきれ

女は目をつぶり

汗ばむ身体をじっと横たえる

II

宵闇

輪を描く人影の真中に

榊を携え女は座っている

めぐる人々

弓太鼓がゆったり夜を刻む

はぜる女のころも

ゆれる榊の枝

四肢をひきつらせ

乱れ落ちる黒髪

胎に力が宿る

魂を胎に宿すのが女ならば

その時確かに女は女であった

言霊がほとぼしる

III

受胎したのは人のいのち

言葉を失い手にいれた

生き物としてのいとなみ

かごのなかでまちこがれていた

みえざるまれびと

いま女の前には熱い男の身体があった

真夏

広葉樹の森

髪にからみつく草の葉

木の間からのぞく青

湿気を含む大気が光る

白いまひるの太陽に

引き裂かれた仮面を投げすて

女は両手をさしのべる

心象実験

透徹したガラスのむこうに封入された哀しみ

白い地面にくっきりやきつけられた影が

不意に奇妙な存在となる 蒸し暑い午後 ゆ

がめられたレンズの奥に ゆらめきだす 思

いの残渣

ただよいぶつかりあい ときにひとかたまり

になって いつか崩れ去っていく まわりに

きらめく無機的な結晶さえ 虚ろな幻だ

雑多ながらくたのなか 横たわる 鮮血にま

みれた化石 深層意識下に埋もれた罪の意識

が 生存の証明ならば 私は私を殺して生き

ている

心の地層をつらぬく ファイバースコープの

先は失われ 残されたチューブの違和感が

不可触領域で 意識をさいなみつづける

幾重にも組み合わせられた 歯車とレンズのか

らくりは 認識をはるかに超える 因果律でし

かない

圧倒的な夏の緑の量感 おおいかぶさる空は

ひび割れた青ガラスのように 透明さを忘れ
どんよりととろみのついた 厚ぼったい
空気がまとわりつき

異次元の万華鏡の彼方 ただ記憶だけが 化

石化して 重層されていく

地図

オーストラリアの地図は

さかさまの地球

(日本人にとって)

地図の中央は

常に

その地図を作った国

(だから日本は赤くて

世界地図の真ん中にある)

どこの国にしても

彼らにとっては地球の中心

早い話が

ちっぽけな孤島も

世界のヘソ

地球はまるい一つの球

表には中心なんてありはしない

それなのに

表を勝手にわけて

自分が中心といっている

どこも上であり下であり

右であり左である

地球がくるくるまわる

(宇宙の中で)

地球が回る

(孤独に)

固定化した

地図は動かない

夜の思惟

君の存在が何か

ぼくは知らない

モノトーンの

夜の闇になれた

ぼくの眼には

君の姿は

明度の差異

でしかない

それでも

君の血脈は

活発に

息づいている

君は単なる

映像ではなく

内燃機関を持つ

人造物でもない

君は

生きている

存在である

極大の宇宙から

極微の世界まで

思いめぐらせる

君の魂は

無限を内包している

けれどそこにあるのは

はてしない

問いかけだけだ

空想絵画

空色の画用紙

まずはじめに

赤の絵の具を

ぽっちり中心に

周囲にひろがる

プリズムは

なないろ

白い心を

描きいれて

そこに光が

とおりにぬけるのを

待ちます

どす黒い

嵐の雲

もえあがる

夕焼け雲

さらさら

さわやかな

きぬの雲

それらはすべて

ほんの一時に存在する

精妙な光の魔術

ところで

私といえば

画用紙の

遥か下方

茶色や赤や

緑や黒やらが

いりまじる

うすっぺらな

大地のうえに立っている

小さな人影です

冬は白

冬は白

山嶺の雪

軒先の氷柱

窓を飾る氷結晶

さくりと砕ける霜柱

早朝街路を行きかう人々のはく息

そして

開かれる真新しい年のページ

冬は白

季節が始まる手前の

透明な色

夢の断片

I

夜の夢

目覚めてからの夢

おりこまれた時の流れ

あるいは今

ここにいることさえ

II

朝が

まどろみにわけいる

さんざめく光

鳥の声

現実と夢の狭間に

思考する私

とはいえ

この世界だけが真実と

誰か断言できるだろうか

III

いつか見る夕陽の色

黒雲の中

燃え立つ炎

溶鉱炉

溶融し冷え固まり

形成される

もの

IV

思い出は

とぎれとぎれの

記憶の断片

すべては

終わりのない

果てしない

夢のほんのひとこま

遺跡

時の彼方に

現在（いま）があった

心のままに

人生という短い舞を

人は踊る

ただ土が侵していくだけの

いとなみの記憶

ころがり落ちる

連鎖の果て

ふり返る思いは

さらに美しく

ひととき

修復された

過去の景色の鮮やかさに

立ちつくす

夜叉

夜叉じゃ

夜叉がさまよっておる

鬼火が燃えておるじゃろう

あれ あの

黒森のむこうに

真暗な闇

星も月も

厚い雲に飲みこまれ

夜叉の声が

ひびきおる

女子の果てじゃ

子をなくし

男をなくし

なりおうた

おお また聞こえおる

こけむす石塔をすりぬけ

野がける風の音

冬枯れた草原のむこうから

呼ばれる声

もうじき

お山から雪がおりてくる

だんだん夜も白うなる

平泉

かたりかたり

高台から

どんよりした

雲の広がる

平野をながめている

どうしようもない

人の思い

いらだちが

霧雨となって

降り続く

視界の中央

流れる川のいろは赤い

かたりかたり

あれは

血球がぶつかりながら

流れる音

こころが

血を流している

人が登ってくる

この山にある

金無垢の浄土

偶像に

さらに厚く

金箔をはるのは誰だ

虚ろな像は

動かない

気づくと

石化した群衆

化石の

世界を

ただ

川が流れている

ふいに

陽がさしこみ

急激な視野の拡大

灰色の

雲を背景に

虹が

大地からたちあがる

ざわめき

ふるえる大気

ここは現世

月見坂から見下ろせば

刈り取られたわら色の

田畑が静かに横たわっている

花と羅漢様と鬼

ざくり

のみがけずる

鬼はせんから一心に

昨日沢で見つけた

埋もれ木を

ほりつづけている

のぼしほうだいの髪を

ささくれた床板にたらし

すりきれたござの上で

あぐらをかいた足を

ふんばりながら

けずっている

まめだらけの節くれだった指

やせこけた土色の顔

血走りぎらつく瞳

そこはうす暗い崩れかけた庵のなか

ひんやりとすんだ風の流れてくる

むしろをつるした戸口のむこうには

春の山

山桜

しだれ桜

れんぎょう

こぶし

山つつじ

さらさら飛びかう

花びらと

たゆとう花の香

うすがすむ若葉の陰には

木彫りの羅漢様たちが佇んでいる

笑い かなしみ 迷い

愛すること 孤独

羅漢様はすべてのところをもっている

そうして羅漢様は

うっすら微笑んでいるようだ

やわらかな緑の光にうずもれて

つらさや憎しみさえ

とけてしまったかのように

ここは深い山の狭間

空からも海からも

人里のにぎわい

時の流れからもとうにわすれられて

それでも

そよかぜにゆられた

花びらが庵に舞い込むたびに

鬼はぎくりとするのだ

鬼の手にはひとの血がしみついている

赤さびてぼろぼろの

刀をのみにもちかえて

だから鬼は羅漢様をほりつづける

夕べは白く

昼はあざやかに花がすみ

鳥の声さえひそやかに

そうして

ひとがひとり死ぬごと

羅漢様は生まれてくる

花は散りまた咲いて

山は春

永遠にとぎれない春

阿蘇

山だ

山がある

目前に広がる

緑の平野の向こう

立ちほだかる

秋にいろどられた外輪

からめとられた

街からのがれ

うつろう季節のなかを

かけぬける

彼方

重なりあう雨雲

噴煙の下

灰色にぬりこめられ

焼けただれた

火処の底から

地霊のささやきは

どろどろとはいあがる

音

でんでろ

でんでろ

太鼓が鳴った

空の奥まで

大気はすんで

木の実

もみじ

秋は豊穡

うずまくいわくら

立ち並ぶ石柱

母たちは

胎に神を宿し

さざめきあう

豊満な体

肌をいろどり

とぐろまく

螺旋

踊る

踊る

山が燃える

山がうなり

母たちは

踊る

歌

あああああ

ああああ

まつりうたたく

あるいはひくく

はきだされる吐息

おおおおお

おおおお

火の山の息吹

ふきつける

熱くさかまく大気

ううううう

うううう

腕をひろげ

抱きしめる

地鳴り

えええええ

ええええ

身を貫く

衝動

うたげ

おおおおお

おおおお

あるいは

神と母との

交合

怨

黄昏深く

色褪せる景色

土の時は過ぎ

失われたまつり

炎は消え

男の手には剣

母たちは去り

女が残った

力に捕らわれた

女たちの白い肌

大地はほほえまず

構築された世界

追うもの追われるもの

鉄の時が覆い

男たちは東へ向かう

女たちの流した

血のあとを辿り

雷

荒野

赤茶けた記憶の中

北へつづく

まだらな道

時の流れから

いやしめられ

おとされた

地霊は叫ぶ

黄泉の底

吹き抜ける風

さまよう

鬼女の胎内に

満ちる

もの

大地は血を含み

遠くから

漂う

嗚咽

白い闇

つきだされた手は

虚空をつかみ

かつての母たちは

またひとり

雷をうみおとす

あとがき

ちょっと解説です。実はこの前に1冊詩集を出しています。それきり本にする機会を逃し、放ってあった詩をまとめてみました。とにかく期限で書くというのが苦手で、直感さまが来ないと何も書けない人間なので。その結果当時属していた詩の同人をやめることになったのが十年以上前のこと。それが今になって詩を書いてもいいかなと思えるようになったのは、それだけの時間が過ぎ去ったからだと言えるかもしれません。

『豊穰の月』は主に行った場所のイメージを元に神や歴史といったテーマに沿ってまとめたもの。『華月宮』はおしらさま伝説が下敷きとなっています。『夜の森』には一部、当時観た芝居のイメージがそのまま入ったりします(^);

『心象実験』はやや哲学っぽいテーマに沿って。実際に当時私が顕微鏡で見ていたのは、某病院の患者さんの尿沈渣だったりします(爆)

『夜叉』の『夜叉』はその後、オリジナル小説の頭にそのまま使っています。『黒森』という山里で鬼婆と化した女とその娘の因縁話です。下敷きは遠野物語の寒戸の婆。

『古幻視行』は当時読んだマンガ『ヤマタイカ』の影響と、たまたま出張のついでに寄った阿蘇のイメージを合わせたものです。

今読むと、本当に甘っちょろい詩ばかりですが、懐かしい作品ばかりです。読んで下さったみなさま、本当にありがとうございました。

2010. 10. 10 8:24

三浦礼未